

〈論説〉

## ソ連占領期東ドイツのキリスト教民主同盟

—— 自立した政党から衛星政党へ ——

近 藤 潤 三

はじめに

ドイツ統一の過程で東ドイツ（DDR）にはいくつもの政党や政治団体が設立された。現在も緑の党（正式名称は同盟90・緑の党）に名称が残っている同盟90は代表的なものの一つである<sup>(1)</sup>。その多くは1990年3月の人民議会選挙を経て10月の統一までに西ドイツの既存の政党に吸収されて姿を消したが、他方で東ドイツに長く存続し、社会主義統一党（SED）の独裁体制の一部だった政党も西ドイツのそれと合体した。東のキリスト教民主同盟（CDU）と自由民主党（LDP）がそれである。合体の過程では、東ドイツ時代の両党の役割が当然ながら問われることになった。すなわち、独裁体制に対する抵抗やブレーキの役割を果たしたのか、それとも多党制の外観で独裁を隠蔽し、それを補強する支柱だったのか否かという問題である。ただ社会民主党に限っては、1946年に占領権力の強圧のもとにドイツ共産党と合同させられて消滅していたので、ドイツ統一の過程で新たに結成されたという相違がある。しかし同党の場合にも結党の立役者で初代党首のイブラヒム・ベームがシュタージの協力者だったことが発覚するという重大な汚点が染みついていたことを看過すべきではないであろう<sup>(2)</sup>。

以下では東ドイツの政党をキリスト教民主同盟（CDU）に絞って考察する。その理由は、大量とはいえなくても研究蓄積がそれなりに存在するからである。また時期としては1945年の結成から1949年の東ドイツ建国から数年後あたりまでに限定したい。国家としての東ドイツが存在した40年に及ぶ期間のうち、初期の短い時期には注目に値する人物や出来事が見出される。しかしその後の大半は文字通り伝導ベルトといわれる役割に徹し、政党の名に値しないというの

が一般的な理解とってよいであろう。その意味で、今でも一部で記憶にとどめられているヤーコブ・カイザーのような抵抗者を輩出しつつ、キリスト教民主同盟が変質していくプロセスこそ、東のキリスト教民主同盟の性格を捉えにくくしている原因であると考えられるのである。実際、ドイツ統一当時に問題になったのは、東のキリスト教民主同盟が抵抗者の役割を担っていたのか、それとも適応、迎合から積極的協力までに至る人々の集合体にすぎなかったのかという論点であり、波紋を呼んだCh.デイトフルトの話題作『一蓮托生』<sup>10</sup>のように、果たして一つのレットテルで全体を一刀両断することが可能なかどうかという問題だったのである。

以下の考察では、敗戦から1950年代初期までの7・8年の比較的短い期間を扱うが、その間の変化が大きいことを考慮して、二つの局面に区分して検討を進めたい。そして1950年代初期以降を第三の局面として位置付けることにしよう。すなわち、CDUが政党として創設され、主体性を貫こうと苦闘した敗戦直後の立党から1947年末までの第一の局面、ソ連軍政本部とそれに従属する社会主義統一党による締め付けが強くなり、CDUが弱体化していく第二の局面、最後はCDUが自立性を喪失し、衛星政党に転化した1950年代初期以降の第三の局面である。なお、長い第三局面については踏み込んだ検討を行わないこと、また、ここで行うのはもっぱら既存の研究文献に依拠した考察であり、一次史料は全く利用していないことを断っておかねばならない。前者の理由は、期間が長くても終末期を除くと注目に値する変化が見出されないことにある。他方、後者の点についていえば、キリスト教民主同盟の文書類はコンラート・アデナウアー財団に、自由民主党のそれはテオドア・ホイス・アカデミーに保管されているが、いずれも広い書庫を埋め尽くすほどの膨大な分量であり、その検討は現地の専門研究者の手に委ねる以外にないからである。

## 1. ソ連占領地区におけるCDUの創設 - 第一局面

国土の大半を占領され、廃墟同然となったドイツが連合国に無条件降伏した

のは、1945年5月8日のことである。それから一カ月が経過した6月9日、後の東ドイツ（DDR）となる地域には占領統治を実施する機関として、ソ連軍政本部（略称SMAD）が設置された。場所は降伏文書の調印が行われたベルリンのカールスホルストにあるかつての軍事施設である。同地の本部の下には西側からソ連占領地区（略称SBZ）あるいは単に地区（Zone）と呼ばれた占領地域全域に張り巡らされた、州から地区レベルまでの重層的なネットワークが構築された。この機構を使い、占領支配の全権限を与えられたSMADが一元的にSBZを統治することになったのである<sup>(4)</sup>。

設置の翌日、すなわち1945年6月10日にSMADは命令第2号を発した。そこには联合国共通の占領目的である非ナチ化を推進する狙いから、「反ファシズム的な政党と労働組合」の結成を許可する方針が示されていた。これにより敗者であるドイツ人は政治活動を認められ、政党や大衆団体が結成されることになるのである。もちろん、「反ファシズム的」という限定がついていることが示すように、占領下での政党結成が完全に自由だったわけではない。しかし、第一に、社会主義的多党制とも呼ばれるように、ソ連をモデルとする一党制が最初から強制されたのではなく、複数の政党の存在が許容されていた点は重要である。実際、「反ファシズム的」であれば、ブルジョア政党であっても許容されたのである。また第二に、命令は結成されるドイツ人の政党が占領権力の統制下に置かれ、その指示に服すべきことを定めていたから、自由に活動できたわけではない点も見落とせない。DDRの政党は実質的な独裁政党である社会主義統一党（SED）の単なる伝導ベルトにすぎなかったと見做されがちだが、当初からそうした存在だったのでは決してなく、一定の限度で自立性を有していたのである。以下で検討するように、自立性を喪失していったのは冷戦の激化とともに占領権力が方針を変化させ、締め付けを強めた結果だったのである。

それはともあれ、アメリカなど他の占領地区ではドイツ人に政治活動がいまだ禁圧されていた段階で、ソ連占領地区ではSMADの許可を受けて1945年6月26日にCDUが結成され、結党アピールが公表された。その冒頭では、「キリス

ト教の文化形成的、倫理的、精神的な力を省み、わが民族のこの活力の源を開く場合にだけ民主主義的な自由と秩序が立ち直れる」として、キリスト教と民主主義が不可分であることが明言され、続けて良心の自由や教会の自立などが強調されているが、その反面、後半の政治、経済、社会に関する部分では私有財産制を肯定すると明記されているものの、具体的内容が全体として曖昧なのが特徴になっている。このようなCDUに先んじたのはドイツ共産党（KPD）であり、周到に準備を進めたうえで、命令の公布の翌日6月11日に結党アピールを発表した。また15日には社会民主党（SPD）が中央委員会の名で設立を宣言した。この両党の場合、民主主義的権利の確立、勤労者の権利、主要産業の国有化など主要政策が項目別に区別して列記されており、基本方針が明確である点でCDUのアピールとは際立った対照をなしている。これら二つの労働者政党の素早い動きは、新設のCDUとは違ってヴァイマル期の延長線上にあることやSMADとの事前の協議や交渉を抜きにしては考えにくいであろう。また7月5日にはもう一つの政党として、自由民主党（LDP）が結成された<sup>45</sup>。

CDUがKPDやSPDと異なるのは、CDUがLDPとともに一般にブルジョア政党と性格づけられるのに対して、後の二党が労働者政党であるという点だけではない。これらの政党がヴァイマル共和国の時期に存在し、ナチスによる過酷な弾圧を経験したのに反し、CDUはヴァイマル期の政治潮流を継承しながらも新たな構想で出発した政党である点でも相違している。CDUの結党アピールではドイツ・キリスト教・民主・同盟という党名にも表れている4つの基本的立場が表明された。まずキリスト教という名称については、公共世界におけるキリスト教倫理の尊重という立脚点とあわせ、ヴァイマル時代まで明確にカトリックを主軸にした中央党とは違い、プロテスタントを含む宗派を超えた立場が含意されていた。次に民主主義では共産主義体制を含むあらゆる全体主義的独裁体制に対する拒絶が表明された。さらに同盟という語については、党という言葉が連想させる閉鎖性を超えた開放性と包括性が表現されているという理解がなされた。最後に党名についてドイツについていえば、CDUが当座はSBZで活動を始めるものの、国土に引かれた境界線を越え、全国的に活動

すること、したがって国土の分割線を速やかに撤去するために尽力することを意味していた<sup>6)</sup>。なお、遅れて西側占領地区でも後のCDUにつながる政治グループが創設されたが、政治的傾向には地域間でかなりの相違が存在していた。しかし後述するパート・ゴードスベルクでの集会にキリスト教民主同盟の名で参集し、その後は一貫してこの名称が使われたことから看取されるように、基本的な構想の面では近似していた。

SBZでCDUの結党に関わった人物では、アンドレアス・ヘルメスが指導的役割を演じた。ベルリンの彼の住居では、ヤーコプ・カイザーはじめテオドア・シュテルツァー、ハインリヒ・グリューバーたちがナチの収容施設から解放され、ドイツが敗北した直後から会合し、「崩壊社会」状況で日々の生存すら困難な中で宗派を超えたキリスト教政党の結成について協議していた。ケルンのヴァルパーベルク・サークルのように類似の関心を有する同様のグループはドイツ国内の各地に形成されていたが、当時の交通・通信網の壊滅状態のため、相互の連携がないままだった。したがって、組織的な一体性はもとより存在せず、基本的立場にも類似面と並んで看過しがたい差異がみられた。ベルリンのグループでも出身階層や経歴が違っていたうえに、政治的立場や世界観的な面での一体性はなく、むしろ不均質さが付きまとっていた。とはいえ、彼らの多くをナチに対する命がけの抵抗という共通の経歴が結びつけ、またヴァイマル時代の政治活動を通じた悔恨と痛苦に満ちた経験が彼らには共有されていた。結党アピールに署名した35人のうち、ヘルメス、カイザーなど17人は中央党、W.シュライバー、E.レンマー、後に党首に就任するO.ヌシュケなど6人は自由主義系のドイツ民主党（DDP）、O.H.フォン・デア・ガブレンツ、P.Y.フォン・ヴァルテンブルクなど12人はプロテスタント保守主義系の出身だったのである<sup>7)</sup>。このように不均質な人々が一堂に会するだけでなく、同じ政党の傘下で行動することは本来ならば考えにくいことであろう。そのことは、逆にみれば、それだけ第三帝国の経験が重く、ドイツの再建が困難だと認識されていたことを表しているといえよう。実際、ナチスの復活を阻止するためには、ヴァイマル末期のような反ナチ勢力の分裂を克服し、大同団結することが

責務であるという思いが共有されていた。また他方では、戦後の混乱の中では共産党と社会民主党の勢力の伸長が必至であり、これと張り合うには対抗する諸勢力が結集する以外にないという情勢判断が多様な政治的出自の人々を結びつけていたことも忘れてはならない。因みにCDU結党に携わった人々のうちでは、ヘルメスとシュテルツァーは抵抗運動に関与した理由で死刑判決を受け、処刑直前に敗戦を迎えて辛くも生き延びた。またフリーデンスブルク、プレーヴェ、シュライバー、ヴァルテンブルクなどは刑務所もしくは強制収容所に収監されていたので、戦後まで生き延びられる保証はなにもなかった。これに対し、カイザー、ネプゲンのように地下に潜伏することによって逮捕を免れ、敗戦の日を迎えることのできた人々もいた。

ベルリンで発表された結党アピールにはSBZでかなりの反響が生じた。それを示すのは、地域レベルでアピールに呼応して多数のCDU組織が作られたことである。ただ地域レベルで権限を持つSMAD責任者の判断により、許可の条件が厳しいところと緩いところがあり、偏りが見られたのも事実であった。

7月22日にはCDUの最初の大きな集会在ベルリンの劇場で開催された。また同日に党の機関紙として『新時代』が創刊された。11月にはそれまでの間に構築された州組織の幹部会の協力を得て結党メンバーのうちから中央幹部会が選出された。党首に相当する第一委員長にはヘルメスが選ばれ、副党首に当たる第二委員長には以前のプロイセン通商大臣シュライバー、第三委員長としてベルリンの食料局副長官を務めるシュテルツァーが選ばれた（表1参照）。

SBZよりも遅れて西側連合国の占領地区でもCDUの結成が進んだ。最初の動きが見られたのはイギリス占領地区のケルンにおいてであり、旧中央党系を中心にしてそこに参集した多様な勢力が合意したいわゆる「ケルン原則」はその後のCDUの発展に大きな影響を及ぼした。しかし、戦禍による通信網の損傷と占領地区ごとの遮断による杜絶状態で相互の連絡もままならなかったため、組織的連携が希薄だったのも事実である。そうした状況下でイギリス占領地区で頭角を現してきたのが西ドイツ建国の父となるK.アデナウアーだった。工業の盛んなラインラントに足場を置き、市場経済を重視し反共の闘士である

彼が戦後初期にCDU内でも有力だった社会主義的潮流に立ち向かい、これを制圧して社会的市場経済を骨組みとする西ドイツを作っていくことになる<sup>8)</sup>。

それはともあれ、ベルリンでCDUを結党した創設者たちは、ドイツの首都としてのベルリンの地位を根拠にして、当然ベルリン・グループに全国のCDUを率いる資格があると主張した。イエーガー通り59番地にあったベルリン・グループの本拠は自己をCDU中央本部・全国事務局と位置づけ、西側の組織を含むキリスト教民主主義グループの最初の全国的集会もその主導で開かれた。それが開催されたのは1945年12月14日から16日までの3日間であり、場所は後の西ドイツの首都になるボン近郊のバート・ゴードスベルクである。しかしながら、その場でベルリン・グループは全国的な指導権の要求を貫徹することはできなかった。その席で全国組織の結成を決めて主導権を握るのがベルリン・グループの狙いだったが、決定されたのは連絡機関をフランクフルトに設置することにとどまったのである。こうした結果になったのは、組織が地域的に分散していてまとまりのない西側の指導者たちが東のグループに引きずられるのを拒んだからであり、さらにベルリン・グループが占領権力であるSMADによって最も厳しく統制され、圧力と抑圧に晒されていたことからソ連の影響を警戒したためである。事実、全国的会合に出席するためのヘルメスや幹部たちの西側への旅行はSMADによって妨害された。そればかりか、SBZのCDUは、西側のそれとは異なり、1945年7月14日に結成された「反ファシズム・民主主義諸政党の統一戦線」すなわち一般に「アンティファ・ブロック」と呼ばれる政治組織に編入されており、ファシズム反対の旗印の下で、西側の政党ほどの自由な行動が許されていなかった。SMADが作り上げた「アンティファ・ブロック」の運営にSMADは直接的に関与してはいなかったが、許可された4つの政党、すなわちKPD、SPD、CDU、LDPの全会一致によってのみ決定をなしうるとされていたため、共産党が反対する決定を行うことは不可能であり、換言すれば、SMADを保護者とする共産党との協力が他の政党に強制されていた。無論、その反面ではCDUが反対する政策をKPDなどが押し通すことができず、その限りでCDUの自立性が守られる仕組みでもあったことを

看過することはできない。いずれにせよ、政党としての許可を与え、各党の上にSMADが君臨している以上、ベルリン・グループはブロックでの協力を条件にだけ政治活動が許容されることを認識していたし、それだけでなく、同時にまた諸政党の分裂がナチスの権力掌握を許したという反省に基づき、反ファシズムの立場の政党間の協力を重視していた。戦争終結からしばらくは冷戦の予兆はあったものの、ソ連の対ドイツ政策の方針は明確ではなく、一党制の押しつけの脅威が希薄だったために、ナチスの復活を阻止し、その根を断つことが優先する課題と見做されたのである<sup>9)</sup>。

## 2. 初期CDUの政治的位置

それではSBZのCDUはいかなる政治的役割を担っていたのだろうか。

SPDやKPDが労働者政党だったことには間違いないが、これに対してしばしばCDUはブルジョア政党だったといわれる。しかし乏しいデータを踏まえるなら、その呼称は適切とはいえないし、創設者たちの自己理解においてもそうである。というのは、1948年3月の党員の社会的構成に関する調査によれば、CDUの党員の26%は職員層であり、22%は主婦であった。また自営の手工業者が12%、農民が14%だったが、労働者がこれらを上回る16%を占め、自由業が5%だった。これらの数字から、ブルジョア政党というよりは多様な社会層の包摂を特徴とする国民政党と呼ぶのが相応しいとも指摘されている<sup>10)</sup>。特に目立つのは女性の比率であり、約40%に達している。また95%はナチスが政権に就く1933年以前にはどの政党にも所属したことがなかった。もちろん、これらの数字の評価には慎重を要する。というのは、調査時点は敗戦後の混乱がまだ続いていた時期であり、政党が社会の中に安定した位置を占めるには至っていなかったからである。そのことはCDUの党員数の変化にも示されている。1945年末の同党の党員数はまだ7万人でしかなかったが、2年後の1947年末になると21万8千人を数え、2年のうちに3倍強に増加している（表2参照）。このことは社会の変動が激しかったことを伝えていると言えるが、いずれにし



でもこの結果、SBZのCDUは同時期の西側占領地区のCDUよりも規模が大きかったといえる。またSBZで結成されたもう一つのブルジョア政党であるLDPと比べても多くの党員を擁していた。この政党の党員数は1947年末で18万8千人であり、CDUには及ばなかったからである。

このようなCDUの状態は、KPDとSPDとが合同したSEDとは異なる未来に国民を導く資格がCDUにあるという自信の裏付けともなった。SEDの成立過程に関しては、SPDに対する強圧を重視して強制合同だったとの見方が根強いが、労働者政党の分裂を克服しようとする意思がSPD側にあり、対等合同の約束にかける期待がこの意思を強めていたことを軽視するのは適切ではないであろう<sup>10</sup>。いずれにしても、SMADに忠実だったところからSEDは「ロシア人政党」と揶揄されて大きな支持を得ることができなかったが<sup>11</sup>、CDUはそうしたSEDに対するオルタナティブであり、国民を指導する力量とビジョンを有する政党という意味でも国民政党といえたのである。そして当時のカイザーが「マルクス主義か、それともキリスト教か」と問いかけ、二つの世界観の間の選択を国民に迫ったように、実際にCDUの指導者たちはCDUがこうした意味での国民政党であると考えていたのであった<sup>12</sup>。要するに、CDUは社会的構成や自己理解において国民政党といえたのである。

ところで、SMADによって占領統治を補助するために1945年7月25日の命令第17号に基づいて中央行政機関が作られたが、主要なポストは共産党と社会民主党が独占した。11人の長官のうちCDUとLDPの所属は各々1人にすぎなかった。そしてSMADの意図を踏まえつつ、ここから経済社会の構造を変革する政策が実施されたのである。そのうちでもっとも大規模だったのは、「ユンカーの土地を農民の手に」の標語で進められた土地改革である。それはナチスの主要な基盤が大土地所有にあるという見地から、これを無償没収して農民、農業労働者、東部領土から流入した難民に分配するものであって、必ずしも共産主義的とはいえなかった。また反ファシズムの立場から、「アンティファ・ブロック」の4つの政党も基本的にこれを支持したのであった。しかし、それに続いて重工業部門の企業がソ連所有の株式会社に接収され、あるいは行政機関

を經由して人民所有という名の国有化の道を辿るようになる一方で、銀行と貯蓄銀行が国有化されたばかりか、経済計画の導入が企図されるようになると、その先には経済生活の社会主義化が見通せるようになった<sup>46</sup>。またこれと並んで、賠償の名目で多数の工場や鉄道施設などが解体されてソ連に移送されたことが、戦争で疲弊していたSBZの経済に重い負担となったことも見落とせない。同時に、これらの措置を推進する政治的装置として、共産党ないしはその変形としてのSEDの主導権がSMADの後押しで固まりつつあったことも重要である。こうした中でブルジョア政党とされた二つの政党に多くの人々が加入したことは、重い事実を教えている。それは、SEDがまだ公式には唱えていなかったにせよ、SBZで将来的に社会主義への転換が強行されることに対する不安を中間的な諸階層が広く抱いていたことである。当時は混乱を利用して西側へ逃亡することも不可能ではなかったが、いずれにしても党員の急速な増大は社会主義化を阻む勢力への期待の表現と見做すことができ、その裏側にある将来への不安を抜きにしては理解しがたいといえよう。1946年4月に合同する前の2月の時点でKPDとSPDはそれぞれ50万9千人と60万5千人の党員を抱えていた<sup>47</sup>。これに対し、数字では見劣りするものの、CDUとLDPでも党員は増大基調にあったのである。けれども、冷戦の様相が色濃くなり、SMADによる両党への圧力が高まるのに対応するかのようになり、両党では党員数が1947年末から減少していった。そして1950年代初期に党内で粛清が実施され、SEDの伝導ベルトという役割に固定化されて自立性を喪失すると、減少に歯止めがかからなくなり、1950年代末にCDUの党員数は10万人にまで落ち込んだまま、安定局面に移行するのである（表2参照）。いささか先回りして言えば、この変化には圧力によるCDUの変質と、社会主義化への抵抗勢力というCDUに対する期待の冷却が映し出されていると考えられる。

CDUの初期の好調な発展は組織面でも認められる。結党から間もない1945年10月に地区組織は441にとどまったが、46年4月になると1591に増え、50年1月には5105で頂点に達した。同じく州組織もそれぞれ自前の機関紙を発行した。ザクセン＝アンハルト州の『新しい道』、ザクセン州の『同盟』などがそ

の例である。

このような上げ潮は、1946年秋に実施されたSBZにおける最初で最後の自由な選挙でも確認される。たしかにブルジョア政党は1946年9月の自治体選挙の際には差別的な扱いを受けた。選挙法令によれば、政党は地区組織がSMADの地区機関で認可されている自治体でだけ候補者を立てることが認められていたので、SMADは認可を与えないか、あるいは認可を遅延させることによって全自治体の約半数でブルジョア政党が選挙に参加するのを阻止した。また宣伝活動についても妨害が行われた。検閲と紙の割り当ての面で差別することによってSEDに比べて遙かに宣伝力が抑えられたからである<sup>66</sup>。このように不利な選挙戦を強いられたにもかかわらず、CDUは平均で9.5%の議席を獲得した。すなわち最低だったメクレンブルク州では5.7%の議席にとどまったが、赤いザクセンと呼ばれ、長くSPDの牙城とされたザクセン州では最高の12.2%を得たのである。もっともLDPも選挙妨害のために振るわなかったのも、その得票も考慮すると、CDUの一定の成功が色褪せるのも事実である。そして両党合わせても、平均で76%に達したSEDの議席率には遠く及ばなかったのである（表3参照）。

1946年10月20日に実施された州議会と郡議会の選挙の結果は自治体選挙とは違っていた。まずCDU幹部会は1946年6月28日に開いた会議で全政党が一つのリストに候補を並べる統一リスト方式に反対することを決定した。それは、一つにはリストに賛成か反対かの意思表示しかできなくなり、異なる政策を掲げる政党の候補から支持する者を選ぶ機会を有権者から奪うことになるからであり、いま一つは、「アンティファ・ブロック」での統一リストの場合、SEDに有利なものになるのが必定と予想されたからである。また第二に、この選挙では候補を立てることに地域での政党の認可が不要だったので、CDUとLDPはどこでも候補者を立てることができ、強気の姿勢を貫けたことも重要だった。こうして迎えた選挙の結果、自治体選挙の場合に比べてCDUとLDPが大きく躍進したのに反し、SEDは重大な敗北を喫したのである。SBZ全体で見てCDUは24.5%、LDPは24.6%の得票率であり、合わせると半数に一手手前の

49.1%だった。これに対してSEDは半数を割り込み、47.6%にとどまったのである（表4参照）。そのため、どの州議会でもSEDは絶対多数を占めることができなかった。加えて、ザクセン＝アンハルト州とブランデンブルク州ではCDUとLDPは合計するとSEDよりも多くの議席を獲得したのである（表5参照）。さらにベルリンではKPDとの強制合意を拒否した同市だけのSPDが48.7%もの得票率をあげ、CDUも22.1%で善戦したのに対し、SEDは後者をも下回る19.8%の得票率に終わり、惨敗を喫したことも付け加えなければならない。これらの結果はSMADとSED指導部に深刻な衝撃を与えるのに十分だったのであろう。というのは、連合国がまだ決裂していなかったこの時点では、選挙によってSEDに多数派を形成させ、SEDの優位を民主主義的に正当化することがSMADの狙いだったが、ヴァイマル共和国の失敗とナチ独裁の惨禍に学んだ有権者の多くは社会主義に共感をもつだろうという期待に反して、SMADの支援にもかかわらず、SEDが広範な支持基盤を形成しえていないだけでなく、ブルジョア政党が侮りがたい勢力を保持していることが明白になったからである。このことは、仮に制限を緩めて政治的自由を許容したならば、SEDの地位が一層脆弱になり、逆にブルジョア政党がますます躍進する事態が起こりうることを容易に予想させるものだった。こうして高まった危機感とブルジョア政党に対する警戒感は、冷戦的状況が醸成され、緊張関係が強まってくると、ブルジョア政党に対する締め付けの強化につながっていくことになる。事実、州議会に議席を得たブルジョア政党の議員たちの反対にもかかわらず、中央行政機関の拡張に伴って州議会の権限は縮小されて単なる協賛機関に歪められ、立法期が終わる1950年には議員が逮捕されたり、あるいは西側への逃亡や沈黙を強いられる中で「自立性の最後の残りを失う」という結末に至るのである<sup>17)</sup>。

こうした問題の検討に移る前に、もう少しCDUの動きを追うことにしよう。

自治体や州レベルでの秋の選挙に先立ち、1946年6月15日から17日までCDUのベルリン会議がシフパウアーダムの劇場で開催された。それはSBZのCDUの最初の党大会とも呼べる集会だった。西ドイツと南ドイツのCDUの政

治家も100人以上がこれに参加したので、占領地区を超えた全国的な大会という性格を帯びた。ところが、その場にイギリス占領地区でCDU指導者の座を固めていたアデナウアーの姿がなかった。彼はSBZのCDUに対する不信感を強めており、その動きを牽制するために出席しなかったのである。そこには1945年12月のバート・ゴードスベルクにおける会合で既に表面化していた各占領地区のCDU間の主導権争いが再現されていたといえよう。

もっとも、それは単純な権力闘争とは呼べなかった。1945年12月、東のCDUの党首に当たる第一委員長ヘルメスは補償措置のない土地改革を唱える共産党との対立を深めていたが、同月21日にSMADが介入して、ヘルメスと第二委員長シュライバーの両名を解任するに至った。そのため、後継の党首には無償没収を支持していたカイザーが就任したが、この交代劇は一つの教訓を残した。この事件は、「アンティファ・ブロック」への組み込みは、原則に及ばない限り同意しにくい政策であっても、SMADを後ろ楯とする共産党が主張する場合、追従することが得策であることを教えたのである。換言すれば、「アンティファ・ブロック」の束縛とSMADの直接的介入があるかぎり、CDUに与えられた政治的行動範囲が狭小であることをみせつけたともいえよう。その意味ではアデナウアーがSBZのCDUに対して警戒感を抱いたとしても無理はなかった。なぜなら、その背後にSMADの存在が垣間見えるように感じられたからである<sup>88</sup>。

こうして最大の実力者であるアデナウアー不在のままベルリン会議が開催されたが、この場で初めてカイザーが多くの人々の前に新しい指導者として登場した。SMADの介入によって党首の座に就いたとしても、ヘルメスと同様にカイザーもまた決してSMADの傀儡となるような人物ではなかった。キリスト教労働運動の闘士として出発した彼は、ヒトラー暗殺を企てた7月20日事件の関係者でもあり、反ナチ闘争に身を賭した勇氣と信念の持ち主でもあった。党首就任後、1946年2月13日に開かれた幹部会でカイザーは「キリスト教的責任からの社会主義」の骨格を提示したが、ベルリン会議でこれに対して広い支持が得られた。そこには事業所レベルの共同決定、必要充足中心で恣意を排した

経済生活の計画化、土地財産と主要産業の国有化などが謳われていた。そこにはキリスト教社会主義の思考を土台にし、世界恐慌による経済的破局と戦時経済における一種の国家社会主義の経験で加工したうえで、廃墟からの国民生活の再建ビジョンが描かれていたといえるであろう。ここで注意を要するのは、第1に、曖昧な表現にとどまっていた結党アピールに比べて明確な指針が示されており、これによってSBZのCDUが進もうとする進路とスタンスが明らかにされたことである。第2に、カイザーが力説したように、その立場が階級闘争を志向する無神論的なマルクス主義とは無縁であり、「すべての国民諸階級の協力による社会主義」とされて、同じ社会主義を標榜していてもSMADやSEDのそれとは根本的に相容れないことが強調されていたことである。そして第3は、ここに示された意味での「社会主義」であれば、西側占領地区でのキリスト教社会主義に近く、一種の左傾化がみられた西側占領地区のCDUの人々からも共感を得ることが可能だったことである<sup>99</sup>。

因みに、カイザーが唱えた「キリスト教的責任からの社会主義」のプログラムは、伝導ベルトへのCDUの変質に伴って抹消された。すなわち、政治システム全体のスターリン主義化が進められた1951年10月にCDUの会議が開催されたが、そこで採択された綱領的文書では「キリスト教的責任」に代えて「キリスト教的リアリズム」という語句が前面に押し出され、社会主義についてもカイザーが否定したマルクス主義的な階級闘争の色調が濃厚になった。さらにソ連を模範とすることが定められ、社会主義への道での労働者階級の指導的役割も明記されたのである<sup>100</sup>。「キリスト教的リアリズム」という表現は、元来は戦後初期に西側で主としてプロテスタントの人々によって使われたが、その主眼がCDU内でのキリスト教社会主義の優位に対抗し、市場経済をポジティブに評価することにあつた事実に見られるように、変質した東のCDUで語られたそれとは方向が逆であり、似て非なるものであつた点に留意が必要であろう。こうした事実が示すように、カイザーの登場から5年ほどで彼の痕跡はほぼ完全に抹消されることになったのである。

それはともあれ、カイザーがヘルメスの後継者になったのは、以上で見たよ

うな「社会主義」的傾向を有する人物だったからだった。それは共通善を基軸とするキリスト教社会主義を土台にし、階級闘争を唱えるマルクス主義に対立するものだったが、ブルジョア政党にいながらも市場や私有財産を絶対視せず、社会主義的である限りでSMADによって評価されたのである。しかしながら、そのようなカイザーが占領権力の不興を買い、敵対的と見做されるようになるのは、時間の問題だった。カイザーが今日まで知られているのは、ドイツの再統一と東西間の架け橋としてのドイツという主張によってであるが、冷戦の前兆が見られる程度で、アメリカのドイツ政策には対立する構想があり、ソ連の対ドイツ政策の基本路線も固まっていない過渡的な段階では<sup>40</sup>、ソ連側からもそれは許容範囲のうちにあると見做された。けれども、トルーマン・ドクトリンの発表などで緊張が高まると、「架け橋」論はソ連にとって重大な障害になっていくのである。それにとどまらない。カイザーのその他の主張もソ連にとっては許容しがたいものだった。すなわち、主にポーランドの施政権下に置かれたドイツ東部領土の回復要求、マーシャル・プランへのSBZを含むドイツ全体の参加の主張、SMADによるCDUの宣伝活動に対する差別扱いに対する抗議、「アンティファ・ブロック」におけるSEDの優位とこれにSEDが操縦する大衆団体を加盟させることへの反対などである。1947年までにはカイザーのこれらの要求はSMADの黙認の限度を超え、彼をソ連による占領統治の障害にしたのである。

### 3. SMAD・SEDとの対立とCDUへの締め付け - 第二局面

こうしてSMADとの決定的な対立が生じ、ヘルメスに続いてカイザーもまた1947年12月に解任されるに至った。その直接的な契機になったのは、人民会議運動を巡るカイザーの行動であった。

カイザーとCDU指導部は、ドイツの一体性を確保し、その主唱者の役割を担うことをCDUの第一義的な任務と考えていた。そのことは1947年7月の党の指針にも明記されている。そのためにカイザーは占領地区を超えた全国的な

代表機関の設置を繰り返し提唱した。とりわけカイザーは一体としてのドイツが担う東西間の調停者という役割を力説したが、東西の緊張が急速に強まりつつあった状況下では、そうした彼の提起は西側占領国やシューマッハーをはじめとするSPD指導部の間で冷遇されただけではなく、西側のCDUからも共感を得るのは難しかった<sup>22</sup>。

その一方で、1947年11月26日に開催された「アンティファ・ブロック」の会合でSED代表が重要な提案を行った。「統一と公正な平和のためのドイツ人民会議 Volkskongreß」を設ける、これにはすべての占領地区の政党、大衆団体、大経営の代表が参加し、地区を超えた協力と再統一の方策について協議するというものである。これはカイザーの提起が挫折したのを見越した上で、間近になったロンドン外相会談を視野に入れて、ドイツ問題での主導権をSEDが握ろうと企図したものだ。この提案はカイザーを苦境に陥れた。一方でドイツ統一の可能性が開かれるものの、他方ではSEDによってドイツ問題が利用されることになるからである。この提案にはもう一つのブルジョア政党LDPは前向きだったが、議論の末、カイザー、レンマー、シュライバーが中心になった12月2日の幹部会の決定で、CDUは人民会議への参加を拒否した。人民会議は現下の状況では本当に全ドイツ的、超党派的な性格を持つことはできないというのが、その理由である。幹部会が怖れたのは、人民会議がSMADとSEDに従属する形だけの全ドイツの代表機関になり、ドイツの多様な政治勢力を実際には代表しないためにドイツの分裂が一層深まる結果になることだった。事実、西側占領地区の諸政党の参加はほとんど期待できなかったのである。けれども、SEDとの対立が深まるのを織り込んだ上で政党としての主体性を保とうとした参加拒否の決定は、一種の挑戦状ともみられるものであり、党内に亀裂と混乱を引き起こした。CDU内にはヌシュケを中心にしてSEDとの協調を重視し、信念で行動するカイザーたちに反対するグループが存在していたからである。その力が侮れないことは、会議への参加が党員個人に委ねられる形になったことに示されている。州組織の代表の多くもカイザーたちの拒絶に反して、プラグマチックな理由から会議への参加を支持した。カイザーやベ



ルリンの党中央が人民会議問題で意識的にソ連との対立を先鋭化しようとしたのに対し、州の代表者たちは参加拒否のためにSBZにおけるCDUの活動の可能性が狭められることを危惧し、対決を回避しようとしたのである。こうして12月6日と7日に2215人が参集してベルリンで開催された人民会議にはCDUから200人近くが出席したのである<sup>44</sup>。

このような経緯で、SMADからはカイザーとレンマーに対する信頼が消失した。それゆえ、SMADは介入を深め、ベルリンのカールスホルストにある本部にCDUの州組織の代表を呼んで党幹部会と袂を分かつことを要求した。その圧力の結果、代表者たちは次のように決定した。SBZのCDU指導部とSMADとの信頼に支えられた協力の基礎が再建されるまで、SBZの党指導部と州組織とは関係を断つ。カイザーへの信頼は揺るがないにもかかわらず、さもないと州組織のSMADとの信頼ある協力は不可能であり、CDUの自立した活動はSBZで必要であるがゆえにこの決定は実施される。

この決定は外部には州組織による反乱と映ったが、SMADが仕組んだものだった。そして一見自主的な決定を踏まえて最後にSMADが登場した。障害になったカイザーとレンマーはSMADによって解任され、排除されたのである。しかしすぐには後継者を立てず、それまで州代表で副党首でもあったH.ヒックマン（ザクセン）とR.ローベダンツ（メクレンブルク）に対して残りの州代表と協力して暫定的に党の指導を行うように指示した。彼らを支援するためにヌシユケ、幹事長のG.デアティンガー、ブランデンブルク州組織代表W.ヴォルフからなる「調整委員会」が設けられたが、1948年9月開催の第3回党大会まで実質的な党の指導機関になったのはこの委員会だった。同時に機関紙『新時代』の編集部も入れ替えられて一新された。カイザー自身は1948年1月12日まで演説禁止の処分を受けた。こうしてカイザーとレンマーの排除を強行し、CDUに分裂を持ち込んだことによってSEDは目標に一歩近づいた。その目標というのは、後述するように、国民戦線を構築し、ソ連をモデルとする社会主義システムに転換することである。

もちろん、SMADの不当な介入にカイザーたちが簡単に屈したのではなかつ

た。カイザーは解任後、忠実な同志とともに西ベルリンに居を移し、そこからSBZのCDUの進路に影響力を行使しようと試みた。上記の「調整委員会」と競合しつつ、「ヤーコプ・カイザー事務所」は地域レベルの党組織とのつながりを維持するとともに、その手段として、「SBZのCDUの真実の声」を自称する日刊紙『日』を発行したのである。1950年9月になると、J.B.グラドル、H.クローネ、R.ティルマンなどカイザーのグループは亡命CDUを結成した。その時点でこの組織には18万人が所属しており、SBZのCDUの唯一の合法的代表であると自任していた。1950年に全ドイツを包括するとされたCDUの創立大会が東西ドイツの境界に近いゴスラーで開催されたが、亡命CDUは100人の代議員を送り込み、州組織と同格という地位を与えられた。またそのリーダーであるカイザーは統一されたCDUの第2副党首に選出された。亡命CDUが重視したのは、統一CDU内部でSBZのCDUと一般ドイツ市民の利益を代表するとともに、西ドイツに逃亡してきた多数の東出身の人々を精神的、物質的に支援することだった。

ところで、カイザーたちが解任される契機になった人民会議は、全部で3回開かれたただけだった。西側からの参加が占領権力によって一部で禁止されたこともあり、参加する人数が減少したのに加え、SEDがドイツ問題の主導権を握る意図でいわば上から押し付けたために、SBZでも広範な支持を取り付けることができなかったからである<sup>99</sup>。実際、人民会議は時間とともに、SEDがブルジョア政党の拒絶を押し破り、大衆団体を動員して強行したセレモニーであることが明白になった。確かに人民会議はドイツの統一と講和条約のために尽力していると主張した。しかし、動力であるSEDの「新しいタイプの党」への転換、経済計画の導入、国家機関の中央集権化など、ソ連モデルに従った政治的経済的構造の改革が進むにつれ、人民会議にとっては「東ドイツの分離国家の形成を疑似議会主義的に正当化する」ことが中心課題になったのである<sup>100</sup>。このことは、1948年3月に開催された第2回人民会議で設置が決まった「ドイツ人民評議会 Volksrat」の活動から明らかになる。人民会議の執行部かつ立法部とされた人民評議会は、全ドイツの代表と位置付けられていたが、実際には

分離国家の形成過程で一種の予備的議会の役割を果たした。そして1949年10月7日のDDR建国に伴い、人民評議会は「人民議会 Volkskammer」に改造された。けれども、西ドイツ成立過程で登場した議会評議会とは違い、人民評議会には民主主義的正統性が欠落していたのである。

それはさておき、西ベルリンからカイザーたちが対抗した「調整委員会」の実質的指導の後、1948年9月に開催された第3回党大会でヌシュケが正式にCDU党首に選ばれた。彼は人民会議問題でカイザーが進めようとしたSMADに対する対決路線のCDUにおける反対グループの筆頭だった。ヌシュケは占領権力との関係改善に努め、これを副党首になったヒックマンやローベダント、幹事長のデアティンガーなどが支える布陣が作られたのである（表1参照）。

第3回大会の席上、挨拶したSMAD代表は今後CDUがソ連に対して忠実になり、その伝声管となることを公然と要求した<sup>99</sup>。しかし、カイザー解任に協力した形になったこれらの反カイザー・グループも、決してソ連に対して恭順の念を抱いていたわけではない。例えばヌシュケは国家イデオロギーとしてのマルクス主義を断固として受け入れなかった。その意味で、SMADやSEDに対する従属はプラグマティックな考慮からとった姿勢だったことを銘記しておくことが重要であろう。米ソの対立が深まった局面では、「架け橋」論に固執するカイザーはCDUの行動を制約する桎梏になっているという判断が働いても不思議ではないからである。表面上は協力を表明しながらも、ヌシュケはSMADへの同調圧力に抵抗しようと試みた。例えば党首になる以前にも1948年2月から8月までSEDの指導権要求とCDU党员に対する差別と抑圧のゆえに「アンティファ・ブロック」での協調を繰り返し拒んだのである。ドイツ統一の旗を掲げ続けたカイザーの功績との対照で否定的に扱われがちなヌシュケは、逮捕されたCDU党员の釈放と権利回復に尽力したし、教会に対する圧迫にも抗った。DDR建国直後のいわゆるヴァルトハイム裁判の折には、本来ファシストと戦争犯罪人を裁くはずの名ばかりの裁判が実際にはSED独裁に敵対的と目される人々を一括して処断したとき、ヌシュケはDDR首相O.グローテヴォールに対して公式に抗議し、下された判決を検証するように迫ったので

あった<sup>44</sup>。とはいえ、彼の前にふさがる壁が厚く、その努力には大きな限界があったのも事実である。

ナチ・ドイツを壊滅に追い込んだ連合国の協力が戦争終結とともに過去のものとなり、1947年12月のロンドン外相会議で決裂が明白になると、当然ながら、戦勝4カ国が分割統治していたドイツを覆う情勢も険悪化した。これを機に西側占領地区と東側のそれでは政治的進路が大きく分岐していくことになったのである。西ドイツ地域ではとりわけ1948年5月の通貨改革以降、明確に市場経済の再生に向けた政治路線が敷かれ、経済が活況を呈するにつれて敗戦後の食糧難や住宅難などの困窮が緩和されていった。その過程で西側のCDUではアデナウアーの主導権が固まり、社会的市場経済を旗印にし、西側統合の路線に傾斜するようになるが、SBZのCDUにはそうした選択肢は存在しなかった。SBZではCDU指導者たちはカイザー解任後もマルクス主義との差異を強調してキリスト教社会主義を掲げ、ソ連の許容範囲と見られたドイツの中立のもとでの統一を唱えた。この意味でのドイツ統一の土台には、SBZが西側から離れていくほどソ連によって全面的に飲み込まれる危険が高まるという判断が働いていた。ヌシュケをはじめとする新たな指導者たちは、CDUの自立性をあくまでも守ろうとするならば、前任者たちと同様に解任される可能性があると考えていただけでなく、CDUそのものが解体される危険も感じていたのである。

ロンドン外相会議以降、SBZではそうした危険が高まった。ソ連共産党の政治局員ジュダーノフはすでに1947年9月にいわゆる「二陣営理論」を提起し、国際政治では中立が不可能であると唱えていたが、すぐにスターリンが是認し、ソ連の基本政策を規定するようになった。当然のことながら、この理論は東欧だけではなく、分断統治下にあるドイツに直結する問題だった。というのは、その理論からは、モスクワから操縦される衛星国システムの構築がソ連外交の主要課題とされたからである。東欧各国では戦争終結直後にはソ連型の共産党独裁体制は強制されず、モスクワに忠実な共産党が権力機構の要所を占めるにとどまったが、衛星国化に向けて、そうした政治体制の改造が強行されることになった。人民民主主義と名付けられた体制へのこの転換過程でいくつもの悲

劇が起こったことはよく知られているが<sup>28</sup>、SBZでもそれは様々な形で推進された。その一つは、1948年半ばから半年計画が開始され、その延長で1949年から第1次二カ年計画につながっていく中央計画経済というソ連型経済モデルの導入である。さらにレーニン主義的組織原則に基づく「新しいタイプの党」へのSEDの改造とそれに伴う旧SPD系勢力の排除や、社会主義へのドイツ特有の道というテーゼの放棄なども挙げられる。これらに加え、後述のように、SEDにとっての脅威となりうるCDUやLDPのようなブルジョア政党の力を削ぐ目的で二つの新党が設立されたのも見逃せない。これらの転換は、ロンドン外相会議後の1948年1月にスターリンが語ったとされる、「西側は西ドイツを自分のものにするだろう。我々は東ドイツからわれわれ自身の国家を造るだろう」という言葉と符合している。すなわち、東西対立の深化を反映して、SBZの将来像は統一ドイツの一部ではなくて、独自の国家という方向で次第に固まりつつあった。同年3月にはドイツ占領を連合国が協議する最高機関である連合国管理理事会からソ連代表が退出した。5月には西側占領地区で通貨改革が断行され、続いてこれに対抗してソ連はベルリン封鎖を実行した。9月にはベルリン市議会から西ベルリン出身議員が追放され、首都ベルリンは文字通り東西に分断された。こうして東西間の緊張は急激に強まったのである。

1948年にはこのように大きな変化が生じたが、それに照らすと1947年末のSMADによるカイザーの党首解任は先触れだったようにも映る。SMADはブルジョア政党に対する締め付けを一段と強めていったからである。既述のように、CDUでは「調整委員会」による暫定的指導を経てヌシュケが1948年9月に党首に就任し、新たな指導体制が形成されたが、その過程でもSMADの介入が深まった。例えばヌシュケを党首に選出した第3回党大会についていえば、地区組織が選んだ党大会への代議員のリストをSMADに提出せねばならず、そのうちの約3分の1がSMADによって不適格とされたし、党大会の西側メディアによる取材は許可されなかった。そればかりか、SMADで検閲と宣伝の責任者であるテュルパノフ大佐は、代議員たちに対して、ソ連の方針に逆らういかなる政党も成果を期待できないと恫喝し、SBZの社会経済的構造のソ連による改革

や、ポーランドとの国境としてのオーダー＝ナイセ線、SEDの指導的役割などを承認することを強要したのである<sup>99</sup>。

このようにして抑圧が強くなっていたとしても、またカイザーの対決路線を否定するヌシュケたちを指導部に選んだにもかかわらず、CDUはSMADの脅迫に簡単に屈したわけではなかった。第3回党大会ではオーダー＝ナイセ線を国境として承認するのを拒否したのをはじめ、SMADの要求のいくつかに従わなかったし、DDR建国直後の翌49年11月にライプツヒで開催された第4回党大会でも次のような光景が見られたのであった。すなわち、ザクセン州組織の代表でもある副党首ヒックマンが「いかなるキリスト教民主主義者もマルクス主義者と一緒になって統一のぬかるみの中に消え果てることはない」と叫んだとき、会場から割れるような拍手が送られ、同じく「共産主義の色彩を帯びた統一されたドイツはあり得ない」という、ケムニッツのカトリック司祭L.キルシュの発言に熱狂的な賛意が示されたのである。さらにSEDに対する公然たるあてこすりや行政機関による法破りに終止符を打つべきという主張なども飛び交い、SED支配に妥協的なヌシュケたちに対する嘲笑さえ見られたという<sup>100</sup>。

党外からの同調圧力の高まりにもかかわらず、CDUの内部にはこのようにSMADとSEDに対する追随を拒み、これに抵抗する機運が存在していた。けれども他方では、CDUの自立性がますます制限され、弱体化しつつあったことも否定しがたい。CDUの党員数が1947年を頂点にして減少傾向に転じたことは既に触れたが、それはSMADへの追従が目立つようになり、不十分にしか対抗できなくなったことへの一般市民の失望の表れであり、同時に、CDUから一般党員を離反させる圧力が強まった結果でもあったと考えられている。実際、政治的に好ましくないCDU党員に人民議会の議席を与えない措置や、政党として自主的に決めるべき除名手続きへの干渉、SEDの介入による主要な党員の除名など、CDUが主体性を貫けず、圧力に屈するケースが増大したのは事実である。この点で、1947年末のカイザー解任に注目しつつ、H.ヴェーバーが、「キリスト教民主同盟の場合、それまでは独自性をずっと保持してきたが、それ以降追従姿勢が目立ち始め、政策や機能を徐々に変化させていった」と指摘

しているのは正しい<sup>30)</sup>。1948年に顕著になったCDUの変容と衰退については、しかし、SBZないしDDRからの逃亡が及ぼしたマイナス効果も見落とせない。CDUは西への逃亡には即座に除名で応じたが、東での政治活動に見切りをつけた黨員たちが、有力者も含めて逃亡するケースが後を絶たなかったのである。そうした事態がCDUの弱体化を増幅したのは当然であろう。実際、1945年6月の結党アピールに名を連ねた35人の創設者のうちで1950年半ばにDDRにとどまっていたのは僅か2人にすぎなくなっていたのである<sup>31)</sup>。

SMADとSEDが1948年4月と5月に相次いで設立した二つの新党もCDUを弱める効果があった。一つは民主農民党（DBD）であり、いま一つはドイツ国民民主党（NDPD）である。前者は農業領域でSEDの政策の伝導ベルトとして機能することを主眼としており、後者は政治生活から排除されるか沈黙を強いられていたかつてのナチ黨員に対して活動の場を与え、同じくSED支配に彼らを引き込むことを目的としていた<sup>32)</sup>。しかしその目的は当然ながら秘密にされていた。表向きは自主的に結成された政治組織という外観が保たれたのである。けれども、それらの中心になったのは、結党の時点で党籍を離脱していたものの、実は筋金入りで信頼でき、かつ無名な者の中から拔擢されたSED黨員であり、故意に転居を重ねることで経歴をもみ消した人物たちだった。この点で両党は最初からSEDの傀儡であり、その新設には農民と旧ナチ黨員を引き寄せると同時に、この領域でブルジョア政党と競合することによってその弱体化を進めることに狙いがあった。実際、これらが「アンティファ・ブロック」に入れば、相対的にブルジョア政党の発言力は弱まるし、後に現実化する「国民戦線」では二つの新党は議席の割り当てを受けることによって実質的にSEDの優位を固めるとともに、ブルジョア政党の割り当てを縮減することでその弱体化に貢献したのである。

ところで、西ドイツの建国を追いかけるように1949年10月7日にDDRが建国された。クレスマンのいう「二重の建国」の完成である。既述の人民評議会が臨時人民議会としてヴァイマル憲法をモデルとする憲法を採択してDDRが成立したのである。しかし、この出来事は全土で祝意をもって迎えられたので

はない。そのことは建国が分断の確定という意味を有していたことを見ただけで了解できよう。DDRでも祝典が行われたものの、CDUはDDR建国の計画に本心から賛成したのではなく、意思に反していてもある約束の履行を期待して賛成に回ったにすぎなかった。その約束とは、元来は1948年に実施が告知され、1949年秋に繰り延べられていた自由選挙を1950年10月に行うというものである。東西緊張がまだ希薄だった1946年までを除くと、冷戦とソ連の占領下では自由な選挙は不可能だったので、CDUでは国家の成立を踏まえた公正で干渉を受けない自由な選挙に対する期待が大きかった<sup>94</sup>。国民の意思が自由に表明されれば、それに基づいて政治・経済・行政での自由な決定と運営が可能になり、占領統治以来のソ連のあからさまな干渉も終結すると考えられたからである<sup>95</sup>。さらにDDR最初の政権にCDUがSEDの実力者W.ウルブリヒトと並ぶ副首相としてヌシケを、また外相として幹事長のデアティンガーのほか二人の閣僚を送り込んだことで影響力を確保できるという期待を指導部が抱いたことも軽視できない。このことは、SPDの側でSED創設に貢献した新首相O.グローテヴォールがCDUとLDPの閣僚を内閣で一緒になった同盟者のなかの「反動派」と呼び、一掃すべき敵と見做していたことによっても間接的に裏付けられよう。けれども、実際にはDDR建国直後の10月17日のSED政治局の決定で内閣を骨抜きにする具体的措置が固まっており、しかも政府の要所にはすべてSED党員が配置されていたのであり、CDUの閣僚が実務を取り仕切る余地はほとんど残されていなかったのである<sup>96</sup>。ともあれ、こうして一定の影響力をもちえたという観点からCDU幹部会は1949年11月12日に既成事実となっていたDDR建国を肯定的に評価する決議を行った。しかし、これには地域社会で日常的にSEDの専横に苦しんでいる下部組織から現実離れと断じる強い批判が浴びせられた。とくにカイザーに近いグループからはドイツ分断を是認したことが指弾され、「ドイツ民族に対する裏切り」とする非難さえ聞かれたのであり、11月に開催された第4回党大会を挟んで党内に厳しい対立が生じたのである。

DDRが成立したのに伴い、人民議会を「共和国の最高機関」とする一方で、言論、集会、出版、信教の自由などの基本権や普通・平等・直接・秘密の選挙



を保障する憲法が施行された。けれども、それにもかかわらず期待されたようにはソ連の干渉は終わらなかった。例えばSEDとのパイプ以外にも政府の省庁にソ連の政治委員が配置され、政権に直接介入する仕組みが維持されたのである。その意味で主権的な国家というのは仮象であり、憲法に明記された基本権も空文だった。さらに大臣ポストを梃子にして影響力を強めるという計算も裏目に出た。政権にブルジョア政党を引き込むことによって幅広い国民の意思を反映する外観を取り繕いつつ、逆にSEDの権力が強化され、独裁への道が開かれたからである。その限りでヌシュケたちCDU指導部はむしろSEDによって利用されたのであり、「妥協の用意によってヌシュケは自分自身をSED独裁を可能にする国家のあぶみにした」というアゲーテンの指摘は正鵠を射ている<sup>99</sup>。

もちろん、CDU指導部の計算が幻想だったと断じるのはその後の展開を知る今日では容易であり、結果的にSED支配に利用されたところからSEDへの協力を批判することも同様である。けれども、たとえ分断と同義だったにせよ、DDRが国家として成立し、主権性を強めてソ連の支配が緩和され、また基本権を明記した憲法の下で間近に自由な選挙が行われるならば、ソ連型社会主義への突進は防止できるという希望を彼らが抱いたとしても、それほど不思議なことではない。さらにDDRでの自由な選挙はドイツ統一への願望の表明になるはずであり、それを踏まえて分断という異常事態を短いエピソードに終わらせる道が開かれるであろうと期待したのも無理からぬところであろう。実際、情勢認識の甘さは否認しがたいとはいえ、形式上は最高機関と位置付けられた人民議会でCDU所属の議員たちは、個人の諸々の自由、寛容、宗教活動の自由、SEDも含む政党の対等、人民所有企業と個人所有企業の同格などを擁護し、それらの保障を得るために努力したのであって、その意義までも無視するのは適切ではないであろう。

ところで、CDU指導部が期待を寄せる自由な選挙は、SEDにとっては難題だった。そしてCDUに有利な結果が見通せた分だけ、SEDにとっては不利な事態を予期しなければならなかった。もし約束通りの自由な選挙を実施したならば、ブルジョア政党の躍進とSEDの敗北が確実視される中で、SEDがソ連

と協力して行ったのは、CDUに対する圧力を強め、政党としての活動を妨害することだった。こうしてCDUの第4回党大会が終わった直後からSEDに批判的な言動をするCDU活動家を攻撃するキャンペーンが開始された<sup>98</sup>。同時に、圧力を受けたCDU指導部は党内の粛清を進めることになった。粛清は多数の地方組織が幹部会の決定に従わないという混乱を招き、除名と離党で結果的にCDUの党員数は1950年9月までに25%も減少した。こうして従来CDU弱体化を一段と強めて成果を収めたSEDは、自由選挙という難題を乗り切る見通しを得た。SBZでは1949年5月に初めて統一リスト方式で第3回人民会議が選出されたが、憲法の趣旨を歪曲して、この方式を建国後の選挙にも適用することがそれである<sup>99</sup>。選挙に参加が認められた政党・大衆団体の議席割り当てをあらかじめ確定した上で、候補の氏名を列記したリストに対する賛否だけを有権者に問う選挙は自由選挙にはほど遠く、通常は独裁政党の隠れ蓑として利用されるが、弱体化したCDUにはもはや統一リスト方式によらない選挙を頑強に主張する力は残っていなかった。1950年10月に予定された選挙を統一リスト方式とすることを是認する指導部の決定は同年9月の第5回党大会で了承された。SEDからの個人攻撃と党の粛清の結果、代議員として党大会に出席したのはSEDに順応する路線を支持する人々が大半になっていたことが、これを可能にしたのである。

もっともCDU指導部のすべてがSEDの圧迫に屈してその要求に唯々諾々と従ったわけではなかった。1950年初頭にヌシュケは公の場で、統一リストは自分の死体を越えたところだけにだけありうると繰り返し強調し、それに断固として反対していたのである<sup>100</sup>。しかし指導部の入れ替わりを経た党内にはソ連とSEDに追随する勢力が台頭していた。その代表格はG.ゲッティングである。親ソ派の彼は1947年にCDUの外郭団体である青年同盟の代表としてCDU幹部会に入り、49年にはファティンガーの後継者として幹事長に就任した。1966年以降CDUの党首を務め、ベルリンの壁崩壊直前の1989年11月2日までその座にとどまってSED独裁を支えたのも彼である。ゲッティングは党首としてSEDに倣って民主集中制をとり入れたCDUに専制支配を敷いたが、1950年の彼は

党内に強力な反対派が存在することを認めねばならなかった。彼によれば、多数の地域組織が抗議のために活動を停止し、一部で地下活動を始めたのであり、DDR全域で自由選挙の廃止に反対するピラが撒かれたという<sup>40</sup>。衰弱したとはいえCDUはまだSEDによって完全には操縦されていなかったのである。

ともあれ、こうしてCDUも同意した統一リスト方式で人民議会選挙が1950年10月15日に実施された。表4に掲げたのはその結果である。統一リストに並んだのはDDR建国と同時に結成された「民主ドイツ国民戦線」に結集したすべての政党と大衆団体の候補である。総数400の議席の配分は国民戦線での協議で予め確定しており、選挙でリストが承認された結果、SEDは100議席、CDUは60議席を獲得した。これらの数字を一見する限り、SED支配が貫徹されたようには見えないであろう。しかし、統一リストに名を連ねる大衆団体とは名ばかりで、SED支配を支えるために社会の諸領域に構築された事実上の官製組織にほかならなかった。またDBDとNDPDは政党を名乗ってはいるものの、既述の通りブルジョア政党を抑え込むために作られたSEDの傀儡でしかなかった。そしてこの時点では自立性をわずかに残してはいてもCDUとLDPはSEDに基本的に追随するようになっていたことを考慮するなら、人民議会は総体としてみればSED支配の協賛機関にすぎなかったとってよいであろう。それは議会という名称から連想される、国民の多様な意思が表明される場ではなく、議会主義的な体裁によって一党支配を粉飾する装置にとどまった。また、これを選出する選挙も、民主主義的形式をとりながらも、実質的には一党支配に外見上の正当性を付与する手段でしかなかった。このような理由により、S.ズックートが言う通り、「1950年10月15日の統一リストによる選挙は政治的転轍に等しかった。SEDがDDRの性格を依然として反ファッショ的・民主主義的だと唱えようとも、東西のドイツ人の意識ではDDRはソ連型の国家になったのである。」<sup>41</sup>ただソ連と違うのは「社会主義的多党制」の名でブルジョア政党を含む複数の政党が存在していたことである。しかし、SPD系を排除して事実上の共産党に変わったSEDを除けば、政治的意思形成を担う西側の政党とは異なり、その他の政党に与えられた役割は特殊なものだった。すなわ

ち、一党支配を隠蔽するアリバイ機能、西側とのコンタクトを維持する全ドイツの機能、SEDの方針を国民に広める伝導機能の三つがそれである<sup>43</sup>。国民の中にある意思を吸い上げるのではなく、これらの機能を果たす限りで自立性を喪失したCDUは存在を許されたのである。

#### 4. CDUの屈伏と伝導ベルトへの変質 - 第三局面への移行

それではCDUから政党としての自立性が失われ、SEDの衛星政党としてもっぱら伝導ベルトの役割を担うようになったのはいつの時点からだったのだろうか。

そのメルクマールとなるのは、CDUがSEDの指導権要求を承認し、その指導に服すことを公式に表明したことであろう。それが行われたのは、1952年10月に開催された第6回党大会の場であった<sup>44</sup>。CDUは敗戦後のSBZでソ連型社会主義に賛同しない社会層の支持を集めていた点ではブルジョア政党と呼ぶことができたが、既述のように、子細に観察すれば支持層の幅広さの点で国民政党というのが適切であろう。また党員数、得票の規模などから見ても、ソ連の後押しを受けたSEDとは対立する、SBZのもう一つの未来への選択肢を表現する政党だったともいえる。そのCDUがSEDに屈服し、衛星化していったプロセスは、自立した政治勢力が壊滅させられ、あるいは様々な社会団体が独裁的支配を補強する組織に換骨奪胎されたことを指してナチ体制に用いられるグライヒシャルトゥンクという概念がここでも使用可能であることを示している<sup>45</sup>。CDUに即して言えば、東西間の緊張が高まり、SBZでカイザーがSMADによって党首を解任された1947年末にはその方向が見えるようになっていた。この時からCDUに対する圧迫が強まったが、それでも様々な形の抵抗が行われ、簡単に屈服したわけではなかった。けれども、この点を考慮に入れても、「1948年には社会主義統一党のヘゲモニー確立と自由民主党とキリスト教民主同盟の弱体化によって、政党システムは決定的に変化した」<sup>46</sup>というH.ヴェーバーの見解は正しい。そうした経緯に照らすと、1952年10月18日の党大会で、

「社会主義建設における労働者階級とその党の指導的役割」を全面的に承認するとした決議は、グライヒシャルトゥンクがひとまず完了したことを告げるものだったといっただいであろう<sup>49</sup>。この結果、CDUはP.J.ラップのいう社会主義的多党制のもとでのブロック政党、すなわち、「互いに競争せず、實際上、政治的決定過程に参加せず、他の政党の指導下に立ち、固有の政党プログラムを断念する政党」に変容したのである<sup>50</sup>。

とはいえ、この党大会で決議への異議が噴き出さなかったのは、ゲッティングによって入念に筋書きが組まれていたからだった。まともな論戦の可能性は存在せず、演説する者の原稿は検閲を受け、参加者にはCDU党員に対する間近のみせしめ裁判の報道で威嚇が加えられていた。さらにゲッティングの発案で、休憩中に共産主義を批判したという理由により数名の代議員が会場内で逮捕された。その上、ソ連治安機関の審査を経ていた代議員たちは事前にゲッティングから次のことを言い渡されていた。「我々が決めた者だけが演説でき、話すのは我々が決めたことだけである。」これ以降のCDUの党大会や会議では予め文書として提出し、審査を受け、変更を加えられた演説以外は行われなかった<sup>51</sup>。全てが筋書き通りに進行することになったのである。

このような締め付けにもかかわらず、大会の場で党内の不一致が表面化するのを防ぐことはできなかった。それゆえにゲッティングは党大会終了後に、少なくとも代議員の半数は西側を向いており、自分の党に対する反感を煽り、ソ連を歪曲したと怒りを込めて語ったという。事実、デアティンガーが登壇して「現代の根本悪は神からの離反である」と述べたとき、拍手喝采が起こったが、その喝采が何に向けられているのかは誰もがわかっていたと彼がいうように、SEDの指導権を承認したものの、CDUはまだ一体としてSEDに従属していたわけではなかったのである<sup>52</sup>。

CDUの内部にはSEDの指導権要求に対する反感や敵意が残っていたにせよ、既に弱体化していたCDUは表面上は屈服し、これ以後、伝導ベルトとしての役割を果たすことによって存在を保つようになった。この意味で、ブルジョア政党CDUはSED独裁体制の一翼を担うこととなり、SEDに対抗する政治勢力

としては消滅したといえよう。クレスマンのいう、「1950年代初頭、社会の全領域で強制と暴力をもって貫徹されたDDRのスターリン主義化」<sup>80</sup>の波はCDUを飲み込み、グライヒシャルトゥンクは一応の完了を見たのである。M.フルブルックは「1948年の夏には、ほとんどの生活領域・政治活動に対する共産党のきわめて密な統制が出来上がり、東独政治の公然たるスターリン化が生じた」<sup>81</sup>と述べているが、これをグライヒシャルトゥンクと同義だと解するならば、1948年の時点ではまだ抵抗勢力は封殺されてはおらず、その後の度を増した強圧により1950年代に入ってようやく封じ込めることができたのである。

ところで、SEDを指導政党とする支配システムが形成される過程は、抵抗勢力に対する抑圧が強められ、おびたしい犠牲を招いた痛苦に満ちた過程でもあった。その一端にはカイザー・グループなどを取り上げた際に触れたが、ここで主要な事例について手短かに振り返っておこう。

カイザーが解任され、機関紙『新時代』の編集部も1947年末に入れ替えられたが、その後も同紙では「ドイツ国民の多数は共産主義的でもマルクス主義的でもない」と唱える論説が載り、「何よりも先に統一を」というアピールや、「共産主義の精神世界との対決を」という呼びかけがなされた。これに応じ、SBZの各地でCDU活動家による抵抗が試みられた。すべての州でCDUの指導的人物たちが逮捕されて刑務所に閉じ込められ、あるいは西側へ逃亡することになったのはその結果である。結党から数年のうちに結党アピールに名前を連ねた指導的立場の人々の大半が不在になるという現象は、圧迫の苦痛と逃亡による痛手がいかに大きかったかの証拠であろう。例えばテューリンゲン州の指導者層ではH.ドルンホーファーがすべての職務を解かれ、有罪判決を受けて長く刑務所暮らしを強いられた。彼は以前のキリスト教労働組合の活動家でナチによる迫害を受けた経歴があり、アイヒスフェルトでのCDU創立者の一人だった。同じアイヒスフェルトの郡長だったA.シェーファーは自治体選挙を前にして反革命煽動の容疑で1946年9月に既に逮捕されていたが、8年の懲役を宣告されて刑に服した。州の食糧大臣G.グローセと州の幹事長G.シュナイダー、結党時の党員H.デーゲンハルト、E.ツェルン、G.フォークト、K.マーゲンなど

は逮捕を逃れて西側へ逃亡した。彼らの罪状はSMADやSEDとは民主主義の理解が違っていたことだったと語り継がれている<sup>53</sup>。

CDUに対する抑圧の代表例としてもっともよく知られているのは、デアティンガー事件であろう。この事件には、SEDで推進された粛清の過程で1950年から52年にかけてサボタージュやスパイ行為などの罪状により除名・逮捕されたP.メルカー、L.バウアー、W.クライケマイヤー、K.マハンなどSEDの大物党員の事件と通底する面があるが<sup>54</sup>、やはりCDU所属の現職外務大臣だったところに違いがあるといえよう。デアティンガーはCDU内部の親ソ派の筆頭であり、CDUのグライヒシャルトゥンクを内側から推進したことで知られる。その彼が1953年1月13日にシュタージによって逮捕されたのである。容疑は軍事・経済スパイということだった。同年6月には「血に飢えたヒルデ」の異名で恐れられたH.ベンヤミンが長官を務める最高裁判所で懲役15年の有罪判決を受けた。裁判では彼が武装集団をDDRに送り込もうとしたとか、DDRを西ドイツに組み込む陰謀に加担していたことなどを示す証拠が出されたが、真相は現在も明らかではない。ただデアティンガー自身の回想では、カイザーの「キリスト教的責任からの社会主義」から「キリスト教的リアリズム」にCDUの指針を転換した際にローマ法王の所説に依拠したことや、「キリスト教インターナショナル」を唱道したことがソ連の不信を買ったことが、事件の背景として挙げられているという<sup>55</sup>。

デアティンガー事件と並行して、エアフルトとゲラではCDU黨員たちに対するみせしめ裁判が行われた。この裁判では大抵の被告は長期の懲役刑に処されたが、これに伴ってCDUは粛清と自己批判の新たな波に包まれた<sup>56</sup>。その結果、党内で統制機関の力が増し、デアティンガーの同類をあぶり出すために党指導部の全員が審査された。のちにまとめられたところでは、このような締め付けのゆえに、1950年代前半だけで幹部会員もしくは地域組織の幹部の活動歴がある黨員のうち100人近くが逃亡した。理由は、デアティンガーのようにソ連に忠実で高位の人物さえ粛清されるのであれば、反対派と見做されうる自分たちが逮捕・投獄されるのは時間の問題だという不安に駆られたためだったと

されている。こうして肅清や逮捕が繰り返された結果、抵抗勢力の中核になるべきCDUの活動家の多くがSBZないしDDRから姿を消した。そして活力を削がれたCDUは、冷戦構造が固まり、ドイツ統一の現実味が薄れるなかで、結党当時に有していた国民政党としての政治力とSEDとは異なる将来像掲げる対抗力を喪失して、SEDの衛星政党に転落していったのである。

## 結び

本稿の冒頭近くで指摘したように、東のCDUの性格は白か黒かという単純な割り切り方には馴染まない。その理由は、CDUが出発から間もなく占領権力であるSMADとそれを後ろ盾とするSEDの強い圧力に晒されてきたからである。三つの局面に区分して本稿で跡付けたように、その圧力によってCDUは変質し、冷戦が激化していた1950年代初期にはSEDの衛星政党と化したのが、最初からそうした性質を帯びていたわけでは決してないのである。その意味で、東のCDUの性格を把握しようとする時、変質過程に焦点を合わせることが必須になるといわねばならない。この観点に立つならば、例えば「1945年7月14日に4つの政党が属した反ファッショ・民主主義諸党の統一戦線が形成されたときにSBZにおける民主的な政治発展の終わりが始まった」とするM.ウールのような見方は誇張といわねばならないのは明白であろう<sup>99</sup>。こうした認識では、東での民主主義の可能性は1945年5月の敗戦の時点で事実上ゼロに近かったことになってしまい、民主主義を目指す努力は初発から敗北の道が定まっていたことになりかねないであろう。換言すれば、ドイツの敗戦と東部でのソ連の占領統治のスタートからSED独裁の確立までは一直線の道と見做され、様々な方向の可能性を孕んだ過渡期という側面が視野から抜け落ちるという問題が生じるのである。

1990年にドイツが統一し、これに伴って東西のCDUも統一した。西のCDUの党首H.コールが引き続き党首を務め、統一まで最後のDDR首相の任にあったL.デメジエールが副党首となった。市民運動団体「民主主義の出発」を起点



に政治の世界に入ったメルケル現首相はこの時、党歴の浅い新参のCDU党员としてコールによる異例の抜擢で新内閣の閣僚に就任し、「コールの娘」という異名を奉られることになったのである。しかし、東のCDUからそのまま合同したCDUに横滑りし、新連邦州の州議会議員などに収まったかつてのCDU党员にはドイツ統一直後から多数の不祥事が発覚し、辞任が相次ぐ結果になった。その多くはシュタージ非公式協力者（IM）だった経歴が露見したためや、議員としてのモラルが欠如した行動によるものだった<sup>88</sup>。そうした事態になったのは、しかし決して偶然ではない。その裏には、DDR当時のCDU党员としてSED独裁と密着していたことや、主体的に政治に参加するのに必要な気概や資質を育ててこなかったことがある。そればかりか、根本的には東のCDUがSEDの伝導ベルトにとどまり、基本的に独裁体制に順応した人々の集合体であって、批判的精神を鍛え、理想を語り情熱を傾けて活動する場ではなかったことが根底にある<sup>89</sup>。弾圧に耐えてナチスの時代を生き抜いた人々が中核だった事実が示すように、東のCDUは初期には批判的精神が横溢し、圧迫にも容易に屈しない政党であり、戦争による荒廃からドイツを再建する熱情は他の政党とも共通していた。しかし、SMADとSEDによる圧迫のために活力が衰え、主要な担い手も逃亡などで失う一方、悲願のドイツ統一が二重の建国による分断の固定化と冷戦の激化で遠のいた末に、SEDの指導権要求を承認して自主性を放棄するに至ったのである。こうして形骸だけがその後に残されたが、当初の魂が完全に消失していた点で、初期のCDUとは完全に異質な存在だった。つまり、誇張の誹りを恐れずに言うならば、戦後の東ドイツ地域には二つのCDUが存在したのであり、ドイツ統一後の混乱はこれらを混同したところに起因していたといつてよい。また、この視点に立つなら、例えばE.ヴォルフが「共産主義者からの締め付けを一度も払いのけられなかった」ことを指摘しつつ、CDUなどを「独裁に薄っぺらな民主的外装をほどこすアリバイ政党」<sup>90</sup>と呼んでいることについても、前述のウールと同様に余りにも直線的な理解であって、過度の単純化という批判を免れないことが明瞭になるであろう。

ベルリンの連邦議会議事堂には議会事務局が入る巨大な建物が隣接してい

る。この建物には本稿でたびたび言及したカイザーに因み、ヤーコプ・カイザー・ハウスという名がつけられている。またそれ以外にもカイザーの名前を冠した広場なども存在する。こうしてカイザーは、CDU初期に主導権を争ったアデナウアーの政権で統一問題を担当する西ドイツ政府の閣僚になり、ドイツ統一に尽力した政治家として記憶されている。けれども、彼の重要な功績が東ドイツにあることや、彼が党首として苦闘したCDUがDDR時代のそれとは異質であることはもはや忘れ去られる運命にあるといえよう。東でCDUに活力のあった期間は短く、DDR自体が薄明に沈みつつある今日では、そのCDUが見舞われた苦難は歴史の小さなエピソードにすぎなくなりつつある。しかし、戦後ドイツの歩みを振り返り、初期の様々な困難を考える時、その些細なエピソードには意外に大きな意義があることが分かる。J.コッカによれば、近年のドイツでは「20世紀の『ドイツの二つの独裁制』－ナチ・ドイツおよびDDR－について語る事、そしてこの両者を比較することが、ごく一般的になった」<sup>60</sup>といわれるが、そうであればなおさら、ナチスで独裁を経験したドイツでなぜ再び独裁が生じたのかを解明することが重要になる。そしてこの問いに答えようとするならば、独裁が成立する過程を権力の側からだけではなく、抵抗する勢力にも視点を据え、それがなぜ、いかにして押しつぶされたのかを考察することが求められよう。これに関し、筆者は戦後初期にソ連がSBZに設置した特別収容所を例にして抑圧体制の形成過程を追跡し、あるいは各地で展開されて犠牲を払った青年層の抵抗運動や様々な悲運に見舞われた人々に焦点を当てたことがある<sup>61</sup>。それらと同様に、政党レベルについても、壊滅したドイツの再建を目指してCDUなどに集った人々が嘗めた辛酸に視線を向け、その実態を掘り起こすことが必要になると思われるのである。

## 注

- (1) そのうちの主要な組織につき、山田徹『東ドイツ・体制崩壊の政治過程』日本評論社、1994年、281頁参照。

- (2) ベーメについては、今では伝記的研究がある。Christiane Baumann, Manfred "Ibrahim" Böhme: Ein rekonstruierter Lebenslauf, Schwerin 2009.
- (3) Christian Dittfurth, Blockflöten: Wie die CDU ihre realsozialistische Vergangenheit verdrängt, Köln 1991.
- (4) SMADの詳細に関しては、次のハンドブックが役立つ。Jan Foitzik u.a., hrsg., SMAD-Handbuch, München 2008. また簡潔な概観としては、Ilko-Sascha Kowalczuk und Stefan Wolle, Roter Stern über Deutschland, Berlin 2001, S.54ff参照。
- (5) 結党の際の各党の宣言ないしアピールはすべて、Armin Friedrich und Thomas Friedrich, hrsg., Politische Parteien und gesellschaftliche Organisationen der sowjetischen Besatzungszone 1945-1949, Berlin 1992に収録されている。
- (6) Johann Baptist Gradl, Anfang unter dem Sowjetstern: Die CDU 1945-1948 in der sowjetischen Besatzungszone Deutschlands, Köln 1981, S.19.
- (7) Siegfried Suckut, Christlich-Demokratische Union Deutschlands, in: Martin Broszat und Hermann Weber, hrsg., SBZ Handbuch, München 1993, S.516.
- (8) 戦後初期の西側占領地区のCDUに関しては、野田昌吾『ドイツ戦後政治経済秩序の形成』有斐閣、1998年が有益である。また戦後史の中でのCDUを通観した研究として、近藤正基『ドイツ・キリスト教民主同盟の軌跡』ミネルヴァ書房、2013年参照。
- (9) Dietrich Staritz und Siegfried Suckut, Einleitung zu den politischen Parteien, in: Broszat u.a., hrsg., op.cit., S.436.
- (10) Siegfried Suckut, Zum Wandel von Rolle und Funktion der Christlich-Demokratischen Union Deutschlands im Parteiensystem der SBZ/DDR, in: Hermann Weber, hrsg., Parteiensystem zwischen Demokratie und Volksdemokratie, Köln 1982, S.517.これに加え、Manfred Agethen, Die CDU in der SBZ/DDR 1945-1953, in: Jürgen Frölich, hrsg., "Bürgerliche" Parteien in der SBZ/DDR, Köln 1994, S.52参照。
- (11) SPDとKPDの合同については多数の研究があるが、差し当たり、Andreas Malycha und Peter Jochen Winters, Die SED: Geschichte einer deutschen Partei, München 2009, S.26ff参照。なお、SEDに関しては多角的に論じたハンドブックが今では存在する。Andreas Herbst u.a., hrsg., Die SED: Geschichte-Organisation-Politik, Berlin 1997.
- (12) Kowalczuk u.a., op.cit., S.63.
- (13) Suckut, Christlich-Demokratische Union Deutschlands, S.527.
- (14) 土地改革については、足立芳宏『東ドイツ農村の社会史』京都大学学術出版会、

2011年の多面的で綿密な検討が参照されるべきであり、工業に関しては、白川欣哉「ソ連占領下の東ドイツの経済構造」『秋田経済法科大学経済学部紀要』39号、2004年、38頁以下の概観が役立つ。

- (15) Friedrich, op.cit., S.77,80.
- (16) Siegfried Suckut, Parteien in der SBZ/DDR 1945-1952, Bonn 2000, S.42.; Gradl, op.cit., S.73.
- (17) Michael Bienert, Die Ausschaltung der parlamentarischen Opposition in den Landtagen der SBZ/DDR, in: Bundesstiftung zur Aufarbeitung der SED-Diktatur, hrsg., Reader, Berlin 2008, S.10. 圧迫の代表例の一つはザクセン=アンハルト州のCDU議員E.エルンストのケースであり、1947年3月に逮捕されて25年の強制労働に処された。
- (18) Siegfried Suckut, Parteien in der SBZ/DDR 1945-1952, S.52.
- (19) Alexander Fischer und Manfred Agethen, Die CDU in der sowjetisch besetzten Zone/DDR 1945-1952, Sankt Augustin 1994, S.26.
- (20) Stephan Zeidler, Entstehung und Entwicklung der Ost-CDU 1945-1989, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B 16-17/1996, S.26. キリスト教的リアリズムに関しては、野田、前掲書、42頁以下参照。
- (21) 安野正明「ドイツ分断の決定」石井修編『1940年代ヨーロッパの政治と冷戦』所収、ミネルヴァ書房、1992年、294、299頁参照。1946年段階でのアメリカ政府部内の対立するドイツ政策構想については、河崎信樹『アメリカのドイツ政策の史的展開』関西大学出版部、2012年、57頁参照。
- (22) Suckut, Christlich-Demokratische Union Deutschlands, S.525.
- (23) Agethen, op.cit., S.54.
- (24) Manfred Koch, Volkskongreßbewegung und Volksrat, in: Broszat u.a., hrsg., op.cit., S.354.
- (25) Ibid., S.349.
- (26) Richter, op.cit., S.291.
- (27) Michael Richter, Die Ost-CDU 1948-1952, Düsseldorf 1991, S.248.
- (28) フランソフ・フェイト、熊田亨訳『スターリン時代の東欧』岩波書店、1979年参照。
- (29) Fischer u.a., op.cit., S.32.
- (30) Gradl, op.cit., S.162.; Agethen, op.cit., S.57f.
- (31) ヴェーバー、前掲書、42頁。
- (32) Fischer u.a., op.cit., S.33.
- (33) 両党に関しては、設立事情についてのS.ズックートの簡潔な説明のほか、Ch.ネーリッヒとM.ヴァルターの概説が参考になる。Suckut, Parteien in der SBZ/DDR

- 1945-1952, S.61ff.; Christel Nehrig, Demokratische Bauernpartei Deutschlands, in: Gerd-Rüdiger Stephan u.a., hrsg., Die Parteien und Organisationen der DDR, Berlin 2002, S.343ff.; Michael Walter, National-Demokratische Partei Deutschlands, in: *ibid.*, S.366ff.
- (34) Richter, Die Ost-CDU 1948-1952, S.182.; Agethen, *op.cit.*, S.56.
- (35) Suckut, Zum Wandel von Rolle und Funktion der Christlich-Demokratischen Union Deutschlands im Parteiensystem der SBZ/DDR, S.165.
- (36) Suckut, Parteien in der SBZ/DDR 1945-1952, S.80, 83.
- (37) Fischer u.a., *op.cit.*, S.34.
- (38) Richter, Die Ost-CDU 1948-1952, S.212.
- (39) Suckut, Parteien in der SBZ/DDR 1945-1952, S.91f.
- (40) Agethen, *op.cit.*, S.59.
- (41) Richter, Die Ost-CDU 1948-1952, S.243. 同種の抗議活動は若者の自主的なサークルによっても展開されたが、同時に犠牲を生むことにもなった。拙著『東ドイツ(DDR)の実像 独裁と抵抗』木鐸社、2010年、第4章参照。
- (42) Suckut, Parteien in der SBZ/DDR 1945-1952, S.96.
- (43) Hermann Weber, Herausbildung und Entwicklung des Parteiensystems der SBZ/DDR, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B 16-17/1996, S.8. この把握はヴェーバーが繰り返し唱えるものである。Hermann Weber, Das politische System der SBZ/DDR zwischen Zwangsvereinigung und Nationaler Front, in: Friedrich-Ebert-Stiftung, hrsg., Demokraten im Unrechtsstaat, Leipzig 2006, S.36.
- (44) Zeidler, *op.cit.*, S.27.; Agethen, *op.cit.*, S.60.
- (45) Dierk Hoffmann, Nachkriegszeit: Deutschland 1945-1949, Darmstadt 2011, S.106f.
- (46) ヴェーバー、前掲書、49頁。1948年はヴェーバーが転換点として一貫して重視する年である。Weber, Herausbildung und Entwicklung des Parteiensystems der SBZ/DDR, S.7.
- (47) Fischer u.a., *op.cit.*, S.36.
- (48) Peter Joachim Lapp, Die „befreundeten Parteien“ der SED, Köln 1988, S.26.
- (49) Richter, Die Ost-CDU 1948-1952, S.333.
- (50) Fischer u.a., *op.cit.*, S.36.
- (51) クリストフ・クレスマン、石田勇治・木戸衛一訳『戦後ドイツ史 1945-1955』未来社、1995年、17頁。
- (52) メアリー・フルブルック、芝健介訳『二つのドイツ 1945-1990』岩波書店、

2009年、20頁。

- (53) Fischer u.a., op.cit., S.37. CDUだけでなく、LDPも含む抵抗と迫害の概略については、Ehrhart Neubert, *Geschichte der Opposition in der DDR 1949-1989*, Berlin 1997, S.55ff.参照。
- (54) SEDの肅清は党のスターリン主義化の一環であり、15万人が除名される大規模なものだった。その詳細については、Malycha u.a., op.cit., S.79ff参照。
- (55) Jochen Franke, *Der Fall Dertinger und seine parteiinternen Auswirkungen*, in: *Deutschland Archiv*, Jg.25, 1992, S.286ff.
- (56) Richter, *Die Ost-CDU 1948-1952*, S.364.
- (57) Matthias Uhl, *Die Teilung Deutschlands: Niederlage, Ost-West-Spaltung und Wiederaufbau 1945-1949*, Berlin 2009, S.126. ウールと違い、A.ビーファングは統一戦線の成立により「政党の複数性が直接に脅かされたようにはみえない」と述べるとともに、他方で、「遅くとも1946年4月のSEDの結成時点で外見上の多元的政党システムが主にSEDの一方支配の隠蔽に使われる発展が始まった」と記しているが、そこに始点を見出す理由を説明していない。Andreas Biefang, *Die Wiederentstehung politischer Parteien in Deutschland nach 1945*, in: *Aus Politik und Zeitgeschichte*, B18-19/1995, S.43.
- (58) そのうちの若干の事例につき、拙著『統一ドイツの変容』木鐸社、1998年、264頁以下および近藤正基、前掲書、130頁以下参照。
- (59) この問題は近年まで尾を引いている。例えば2008年にはザクセン州首相S.ティリッヒ (CDU) のDDR時代の経歴隠しが問題になった。彼が1987年にCDUに入党したことを出世の踏み台に使ったことが明るみに出たのである。その折にDDR末期の市民運動を担った人々の間から、SED独裁を支えた「ブロック政党への加入をSEDからの逸脱や抵抗の証に仕立てあげることほどナンセンスなことはない」という批判の声が聞かれたという。Der Tagesspiegel vom 26.11.2008. これに関連して、CDUのこうした衛星政党化を批判的に研究し、本稿でもその著作を利用したM.リヒターが2010年になってシュタージの非公式協力者だった過去を暴かれてハナ・アレント研究所を解雇されたことも付け加えておこう。Die Welt vom 17.11.2010.
- (60) エトガー・ヴォルフム、飯田収治ほか訳『ベルリンの壁』洛北出版、2012年、45頁。
- (61) ユルゲン・コッカ、松葉正文・山井敏章訳『市民社会と独裁制』岩波書店、2011年、3頁。
- (62) 拙稿「ソ連占領期東ドイツの特別収容所に関する一考察」『愛知大学経済論集』186号、2011年、および前掲拙著『東ドイツ (DDR) の実像 独裁と抵抗』。

表1 CDU指導部の変遷

結党の日 1945年6月26日 設立委員会委員長 A.ヘルメス

1945年12月19日まで

委員長	A.ヘルメス
第1副委員長	W.シュライバー
第2副委員長	Th.シュテルツァー (1945年6月-7月) J.カイザー (1945年8月から)
第3副委員長	E.レンマー

1945年12月20日から

第1委員長	J.カイザー
第2委員長	E.レンマー
第3委員長	R.ローベダンツ
第4委員長	L.ハァヴェーゲン

1946年6月15-17日 (第1回党大会) から

第1委員長	J.カイザー
第2委員長	E.レンマー
第3委員長	R.ローベダンツ
第4委員長	H.ヒックマン

1947年12月のカイザーとレンマーの解任後、H.ヒックマンを長とする暫定指導部

1948年9月18-20日 (第3回党大会) から

第1委員長	O.ヌシュケ
第2委員長	H.ヒックマン
第3委員長	K.グロベル
第4委員長	R.ローベダンツ

1949年11月12-13日 (第4回党大会) から

人事の選挙なし 幹事長 G.デアティンガー

出典 Armin Friedrich und Thomas Friedrich, hrsg., Politische Parteien und gesellschaftliche Organisationen der sowjetischen Besatzungszone 1945-1949, Berlin 1992, S.89.

表2 CDUの党員数

1945	68425	1965	101641
1946	207543	1970	95293
1947	218189	1975	107682
1948	211226	1980	120602
1949	204988	1985	131570
1950	181042	1988	139705
1953	132863	1989	134507
1958	99372	1990 (2月)	130070
1960	100027	1990 (4月)	134034

出典 Michael Richter, Christlich-Demokratische Union, in: Gerd-Rüdiger Stephan u.a., hrsg., Die Parteien und Organisationen der DDR, Berlin 2002, S.297.

表3 自治体選挙(1946年9月)の各党の得票率

	SED	LDP	CDU	VdgB	FA	その他
ブランデンブルク	3.0	7.2	9.4	9.2	0.8	0.4
メクレンブルク	90.3	1.6	5.7	2.0	0.4	0.0
ザクセン	75.7	8.3	12.2	3.7	0.1	0.0
ザクセン=アンハルト	78.6	10.0	7.6	3.6	0.2	0.0
チューリングェン	63.1	13.6	12.3	8.7	1.8	0.5
全体	76.2	8.3	9.5	5.2	0.6	0.2

注 VdgB 農民相互扶助連合

FA 女性委員会

出典 Siegfried Suckut, Parteien in der SBZ/DDR 1945-1952, Bonn 2000, S.43.



表4 州議会選挙（1946年10月26日）の各党の得票率

	SED	LDP	CDU	VdgB	FA	文化同盟
ブランデンブルク	43.9	20.6	30.6	4.9	—	—
メクレンブルク	49.5	12.5	34.1	3.9	—	—
ザクセン	49.1	24.7	23.3	1.7	0.6	0.6
ザクセン=アンハルト	45.8	29.9	21.6	2.5	—	—
テューリンゲン	49.3	28.5	18.9	3.3	—	—
全体	47.6	24.6	24.5	2.9	0.2	0.2

注 VdgB 農民相互扶助連合

FA 女性委員会

出典 Martin Broszat und Hermann Weber, hrsg., SBZ Handbuch, München 1993, S.397.

表5 州議会での各党の議席数

	総議席数	SED	LDP	CDU	VdgB	文化同盟
ブランデンブルク	100	44	20	31	5	—
メクレンブルク	90	45	11	31	3	—
ザクセン	120	59	30	28	2	1
ザクセン=アンハルト	109	51	32	24	2	—
テューリンゲン	100	50	28	19	3	—
合計	519	249	121	133	15	1

注 VdgB 農民相互扶助連合

出典 Suckut, op.cit., S.44.

表6 人民議会選挙（1950年10月15日）の各党の議席数

SED	100
CDU	60
LDP	60
ドイツ国民民主党	30
ドイツ民主農民党	30
自由労働総同盟	40
自由ドイツ青年団	20
民主女性同盟	15
ナチレジーム被迫害者連合	15
文化同盟	20
農民相互扶助連合	5
協同組合	5
総数	400

出典 Suckut, op.cit., S.94.